

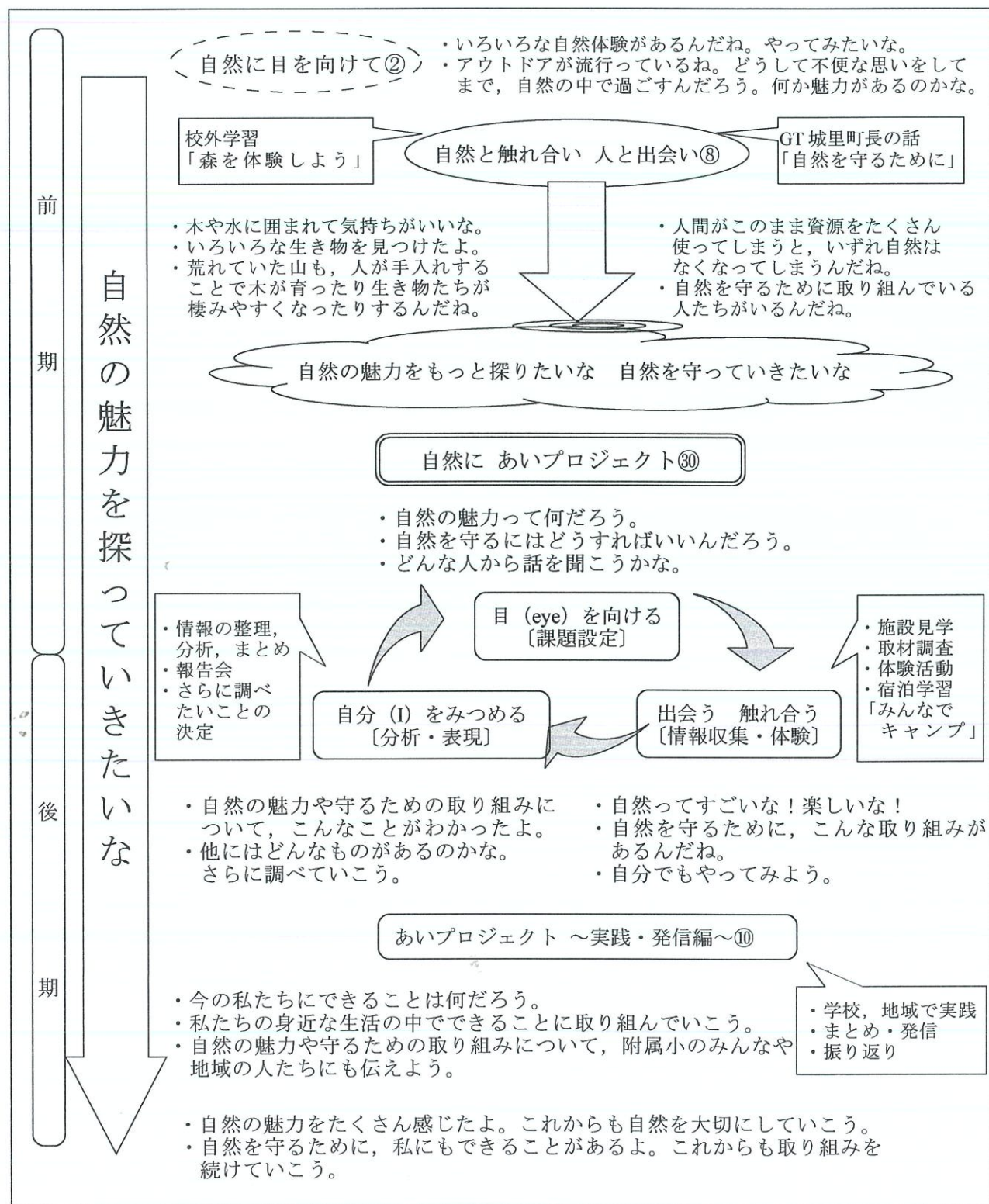
1 テーマ 自然に あいプロジェクト

2 めざす子どもの姿

- 自然に関わる課題を見付け、自然観察や自然体験を通して情報を収集・分析・整理していき、自然の魅力を感じたり自然を守るための方法を見出したりする。
- 課題を解決する中で、新たな問いを見つけて活動を考えたり、活動したことをまとめて発信したりする。
- 自然観察や自然体験を通して学んだことを、次の学びに生かしたり、自分の生活につなげていこうとする。

3 活動計画 (50時間扱い ※20時間をはらから活動に充てる)

○：時数



〈ひびきの立ち上げ～森との出会いから～〉

ひびきの時間でどんな活動をしたか話し合った。これまでコロナ禍により体験活動がなかなか実施できていなかった子どもたちは、「森を探検したり、動物たちと触れ合ったりしてみたいな」と、自然体験に目を向けていた。自然体験の動画を視聴すると、「実際にやってみよう！」という思いが高まった。そこで、「森の自然体験ミュージアム ハローウッズ」に行った(写真1)。子どもたちは自然を肌で感じながらキャストの方から話を聞いた。森には多様な動植物が生息しており、人間が環境を調整することで、豊かな森がつけられていることを知った。そして、木々や葉、虫などに触れながら「人は様々な動物や植物と支え合って生きているんだね」と実感した。



写真1 森を探検する

自然体験を通して子どもたちは、「自然をもっと体験したい」という思いをふくらませるとともに、「自然を守るために、自分たちにできることは何だろう」という問いももち始めた。そこで、「自然と あい」というテーマのもと、自然について探究していくことにした。

〈水を守るために〉

ハローウッズでの学びの中で、自然を守るためには水にも目を向ける必要があると子どもたちは考えた。そこで、ASC(水産養殖管理協議会)に所属する山本さんから話を聞いた(写真2)。水を守るためには、人が魚などの生き物のすみかをつくること、海を汚さないように配慮すること、養殖においても魚が健康に育つようにすることが大切であると学んだ。また、天然漁業によって魚を捕りすぎてしまっており、このままではいずれ魚が捕れなくなってしまうということも学んだ。それを受けて子どもたちは「私たちの身近にある自然も、壊れてきているのかな」と危機感を抱いた。



写真2 ASC 山本さんと

そこで、身近な自然である「涸沼」について調べることにした。涸沼では、ヒメイトトンボをはじめとした希少な生物が生息していることを知った。さらに実際に涸沼に行き、漁業に携わる方々から話を聞いた。涸沼でも、魚などを捕りすぎないように配慮しながら漁をしていること、ラムサール条約のもと水鳥が生息するための環境保全をしていることを学んだ。「涸沼でも、漁師の方たちが環境を守ってくれているんだね」と、身近な自然においても環境を守る人たちがいることを知った。また、漁船に乗り、ヒメイトトンボや水鳥などを見つけ、涸沼の自然の豊かさを体感した(写真3)。



写真3 涸沼で漁船に乗って

〈フードロス削減のために〉

自分たちにできることは何か模索していた子どもたちは、フードロス削減に取り組んでいる城里町の上遠野町長から話を聞いた。城里町では、規格外野菜を有効に使った食品開発をしていることを知った。すると、「食べ物を有効に使う取り組みだったら私たちにもできそう」と考えた。さらに茨城大学のHZP(干し芋残渣削減プロジェクト)の方々から話を聞いた(写真3)。その中で、世界中の食べ物の3分の1がロスになっていること、その3分の1も有効に使えばおいしく食べられることを学んだ。そこで実際に、5年生のみんなで育てたさつまいもを使って、調理を試みることにした(写真4)。皮の部分切る際は、なるべくロスが少なくなるよう、切り方を工夫していた。調理を終えた際には、「うまく作れたけど、皮を捨てるのももったいない」と振り返る子がいた。そこでさらに、さつまいもの皮を使ったレシピを調べた。さつまいもだけでなく、「普段家で捨ててしまっている茶葉も、料理に使えないかな」などと、自分の生活を想起して他の食べ物について調べる子もいた。そして、「今度、〇〇を使った料理を家で作ってみよう」と、自分ができることを見だし、実践しようとする思いを高めた。



写真4 HZPの方々と



写真5 さつまいも調理

年度末、ある子どもは「これまでで、一番自然と触れ合った1年だった」と振り返っていた。インターネットで調べるだけでなく、実際に自然の中に飛びこんで体験してきたからこそ、自然の豊かさを実感し、「この自然環境を守っていきたい」という思いを高めることができた。また、環境保全に携わるたくさんの人たちとの出会いがあったからこそ、子どもたちは環境を守るための取り組みについて視野を広げ、自分たちにできることを見だし、実践しようとする思いを高めた。これからも、学んだことを生かして、身近な自然に愛をもって過ごしていってほしい。

(文責：宮内 翔也)